

資料 白5

令和4年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（2年次）

学校名	北海道白老東高等学校
作成日	令和5年3月15日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	地域に対する興味・関心
	検証の方法	アンケート調査による意識の変化
	検証結果	授業前と授業後の比較において「地域に関する学習に興味がありますか」への回答が58%から82%へ、「地域に関する学習は必要だと思いますか」への回答が82%から88%へ、「白老が好きですか」への回答が29%から71%へ、「白老町は魅力あるまちだと思いますか」への回答が41%から88%へと全体的に向上が見られた。

②	検証の項目	地域への課題意識の向上
	検証の方法	アンケート調査による意識の変化
	検証結果	地域課題の提示を受け、それに対して自分たちで貢献する活動を通し、「自分は地域に貢献できることはあると思いますか」への回答が24%しかなかったものが76%へと飛躍的に向上した。

2 当事者の声について

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に何もなかったと思っていたのは、地域のことを知らないだけだったということに気がついた。 ・町民と対話したりフィールドワークを通して、地域の課題に向き合う姿勢ができた。 ・地域のために貢献している人の姿を見て刺激を受け、自分も何かできないかと考えるようになった。 ・卒業して白老を離れても、白老の魅力を伝えたいと思った。 ・陣屋探究を通して白老にこんなすごい歴史があったとは知らなかった。子どもたちにも伝えたいと思った。
教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題を理解し、高校生でも地域に貢献できることがあることに気がつくようになった。 ・作成した動画が褒められたりして、自己有用感や自己肯定感が高められたと思う。 ・親や教員以外の大人と交流することで、生徒の視野が広がったように感じる。 ・地域の人との交流を通じた体験的な活動を通して、普段の授業だけでは感じることはできない、学ぶこと考えることの楽しさがわかってもらえたように感じる。

資料 白5

	<ul style="list-style-type: none"> ・最近、白老東高校の生徒は（良い意味で）変わったという地域の声がかかるようになった。
地域の方	<ul style="list-style-type: none"> ・大人にはわからない高校生なりの視点は新鮮で、私たちにとっても刺激になった。 ・地域のボランティアに高校生が参加してくれると高校生にも良い経験になると思うし、私たちもすごく助かった。 ・若い人が参加してくれるだけで活気がぜんぜん違う。 ・資料館で高校生が解説すると来館者の目の輝きが違う。 ・高校生と対話して、自分達ももっと学ばなければならないんだということに気がついた。

3 今年度（令和4年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	町教育委員会との打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・町民との対話交流【地域学】（5,6月） ・地域の歴史（白老元陣屋）探究活動【1年総探】（6月） ・商店街のフィールドワーク【地域学】（8月） ・町民との対話交流【1年総探】（9,10月） ・地域の観光資源を探る巡検【2年総探】（9月） ・商店街紹介動画の制作【地域学】（10月） ・地域活動を知る巡検【1年総探】（9～10月） ・成果発表会【1,2年総探、地域学】（12～2月）
5	名古屋外大との連携打合せ	
6		
7	名古屋外大との連携打合せ	
8		
9		
10		
11		
12	コンソーシアム会議	
1		
2		
3		

4 小・中学校との連携を強める取組について

白老中学校の総合的な学習の時間の成果発表会を視察し講評した。
（校長が来賓として参加、地域学担当教諭が助言・講評）

5 学校独自の取組・工夫・実践について

(1) 組織化に関する取組・工夫・実践（校内体制含む）

・これまでの3年生の選択科目「地域学」で、一部の教員によって一部の生徒を対象に取り組んでいたものを、全教員が担当し、すべての生徒を対象に3年間継続して取り組み、地学協働の体験的な学習をふんだんに展開する形へとシフトチェンジを図った。

資料 白5

(2) 地域コーディネーターとの連携に関する取組・工夫・実践

- ・職員室内にコーディネーター専用の机を用意して常駐できるようにし、教員と日常的に連携を図れるようにした。
- ・地域学や各学年の総合的な探究の時間で、地域の方を講師として招聘する場合の選定や依頼といったコネクティング、一日防災学校では行政と、学校祭では飲食店と、ミニサミットでは町議会といった、様々な行事での交渉窓口として、さらに企画立案への参画、運営補助と行った役割において、昨年度に比べはるかに大きな効果を発揮してもらえた。
- ・選択科目の地域学の授業では、年間34回サブティーチャーとして授業に入り、さらに4回にわたって、メインティーチャーとして授業を担当した。

(3) その他

- ・地域学では名古屋外国語大学の学生と共同でフィールドワークを実施した。
- ・1年生の仙台藩白老元陣屋資料館における地域の歴史を探究する学習から発展して、生徒有志が同資料館でボランティアの解説員として活躍している。
- ・総合的な探究の時間での対話交流や巡検など、地域の人々とのつながり持つ機会が増えたことで、多くの生徒が地域のボランティア活動やイベントの手伝い等に参加するようになった。

資料 白6

令和5年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（3年次）

学校名	北海道白老東高等学校
作成日	令和5年4月18日

1 今年度の目標と取組計画

月	取組
3年次 (R5)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地学協働の取組を選択科目による一部の生徒を対象としたものから、すべての生徒を対象に全教員で3年間継続して取り組む校内体制を構築する。 ・コーディネーターが授業の企画や計画段階から参画することで、本校の教育目標を実現するチームの一員として機能する。 ・コーディネーター配置終了に向け校内委員会を発足させるとともに、コンソーシアムが各学習プログラムを実効的バックアップできる体制づくりに向け道筋をつける。 ・課外活動（特に仙台藩白老元陣屋資料館における解説活動）において生徒、地域双方にとってどのような効果やメリットがあるかを検証する。 <p>(主な取組予定)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で継続的に地学協働を推進する体制をめざすため、「地学協働推進委員会」を新たに組織する。 ・3年間を見通した探究学習プログラムを開発する。 ・生徒有志による仙台藩白老元陣屋資料館でのボランティアガイドを継続的に発展させる。 ・名古屋外国語大学や北海学園札幌高校など、他校と連携した学習プログラムに取り組む。

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
Collaboration	各連携機関との有効性について成果をまとめる
Literacy	生徒によるルーブリック評価
Adult	聞き取り等により取組内容とその成果についてまとめる
Student	生徒に対するアンケート調査
System	学校と地域の連携例とその成果をまとめる

資料 白6

3 今年度（令和5年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	陣屋資料館との打合せ	・町民との対話交流【地域学】（5月）
5	名古屋外国語大学との連携打合せ	・進路探究活動（企業、上級学校巡検）
6		【2年総探】（7月）
7	名古屋外国語大学との連携打合せ	・地域の歴史（白老元陣屋）探究活動【1年総探】
8	第1回コンソーシアム会議	（6月）
9		・アイヌ文化学習【2年総探】（7月）
10		・商店街のフィールドワーク【地域学】（8月）
11		・町民との対話交流【1年総探】（9、10月）
12	第2回コンソーシアム会議	・地域の観光資源を巡る巡検【2年総探】（9月）
1		・商店街紹介動画の制作【地域学】（10月）
2		・地域活動を知る巡検【1年総探】（9～10月）
3		・成果発表会【1、2年総探、地域学】（12～2月）

4 自走可能な体制整備に向けた方策

- ・コンソーシアム（及び地域コーディネーター）機能の活用実績を蓄積することにより、地域との協働体制における持続性を保つ。
- ・校内委員会を発足させ、効率的・継続的・発展的な取り組みをめざす。

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

- ・連携校、サポート校との連携会議
- ・北海学園札幌高校との生徒協働学習（アイヌ文化学習）
- ・名古屋外国語大学の学生との連携によるフィールドワーク
- ・担当教諭による他校視察
- ・白老中学校の成果発表会への参加と講評

6 学校独自の取組・工夫

- ・職員室内に地域コーディネーター専用の座席とパソコンを設置し、日常的に教員とコミュニケーションをとることができるよう工夫している。
- ・名古屋外国語大学と連携し、オンラインによる高校生向けのレクチャーや大学生との交流会を実施している。
- ・仙台藩白老元陣屋資料館における高校生による解説活動をはじめ、授業から発展した生徒有志による自主的な地域での活動を展開している。

7 その他特記すべき事項

北海道 CLASS プロジェクトの研究成果

ー 地学協働、新たなフェーズへ ー

- 地方創生における高等学校の果たす役割
- コンソーシアム構築に係る研究実践

3年間の主な取組(概要)

1 地域ならではの地学協働教材の開発

ステップ1 平成29・30年度
国立教育政策研究所教育課程研究センター指定事業「地域の伝統・文化教育」
地域の実態に即した教育課程編成及び指導方法等の工夫改善に資する実践研究

ステップ2 平成30～令和2年度(3年間)
北海道教育委員会「北海道創成プロジェクト」
地域の自治体や企業、産業界などの関係機関等と協働し、地域の課題を解決するためのテーマを設定し、地域とともに解決を図る実践研究

ステップ3 令和3～令和5年度(3年間)
北海道教育委員会「北海道創成プロジェクト」

地域から学ぶ学校設定科目【地域学】の開発

2 地学協働活動の拡充

位置づけ 生徒数	令和3年度	令和4年度	令和5年度	
	3年生地域学 23名	1年生地域学 17名	1年生総探 17名	2年生地域学 10名
指導体制	T1・T2・T3 T4(地域コア)	1学年団 計62時間	1学年団 計59時間(75%)	2学年団 計30時間(75%)
学習内容	町の課題 ・講話 ・フィールドワーク 【名古屋外大】 ・動画研修・製作 ・発表 アイヌ文化 ・ウポポイ体験 解説動画	地域の歴史 ・元陣屋資料館 ・発表 地域コミュニティ ・巡検【学校周辺→海岸】 ・対話交流 ・講座、講話 ・発表	町の課題 ・講話 ・フィールドワーク 【名古屋外大】 ・動画研修製作 ・発表 対話交流 地域発見 ・フィールドワーク ・発表	地域の歴史 ・元陣屋資料館 ・発表 地域コミュニティ ・巡検【周辺→海岸→札幌施設】 ・対話交流 ・発表 ・発表 【ウポポイ】 【学園札幌高校】 ・発表
				町の課題 ・フィールドワーク 【名古屋外大】 ・動画研修・製作 ・発表 対話交流 アイヌ文化 ・ウポポイ体験 解説資料製作 調理実習 【名古屋外大】

3 協働主体の拡充

連携主体	令和3年度	令和4年度	令和5年度(10月まで)
		秋野自動車学校 苫小牧警察署生活安全課 白老町消防、白老防災マスター会 白老町教育委員会生涯学習課 田辺米穀店、baku、カフェ結、後藤家具店 荒井工芸店、休業林、コーナン ラビリンカ、MIRI's Bake、カヌーのむらかみ 商店、くまがひ、ピラザ、カトレア 仙台藩白老元陣屋資料館 民族共生象徴空間ウポポイ 名古屋外国語大学 札幌放送芸術&ミュージック・ダンス専門学校	秋野自動車学校、MIS中野自動車学校 苫小牧警察署生活安全課、白老町消防 白老防災マスター会、自衛隊、NHK 白老町役場(町内清掃) 白老町環境町民会議 商工会事務局、しらおいけ 地域おこし協力隊 文化芸術振興 おもてなしイノベーションセンター 映像企画「オーロラ」制作 MPOのしのび、ヨコハマナイス BLUE SALMON、碧石商店、マーズ、MAINIK'S BAKE フル・フラスコ、SUBVA かに御殿、花の湯温泉、Jones Kitchen、カブライ ガー、ツグミ、ななみまど、SUWA、カワイ、元気 屋、マーズ+ 仙台藩白老元陣屋資料館 民族共生象徴空間ウポポイ 名古屋外国語大学 札幌放送芸術&ミュージック・ダンス専門学校 北海道開拓高校 白老町高齢者大学

4 課外地域活動の奨励、反応の飛躍的向上

令和3年度	令和4年度	令和5年度
①ヨコト海岸ゴミ拾い(6/24) 1 ②1月・カレンダーリサイクル市 1	①イベント「シノブ・チャレ」 16 ②ふくしまちづくりフェア 4 ③白老文化芸術共創出品 5 ④ウレハの杜がイデ 1 ⑤社アートのステイブル 4 ⑥白老町健康マラソンスタッフ 6 ⑦1月・カレンダーリサイクル市 3 ⑧白老町元陣屋資料館がい 4	①Fビレッジ・スポカル 2 ②介護入門的研修 6 ③環境美化・国際交流イベント 6 ④屋根のない写真展 8 ⑤手話体験学習「ちよびっど」 2 ⑥ふくしまちづくりフェア「モルック」 1 ⑦白老町健康マラソンスタッフ 3 ⑧虎杖浜写真展 8 ⑨ルーツ&アーツ白老 14 ⑩白老町元陣屋資料館がい 4
活動人数計 1	活動人数計 43	活動人数計 54

高校生の存在感が地域に浸透

2 持続可能な学びスタイル

1 スクールミッション・重点ミッションの明確化

ステップ1 令和3年度 【スクールミッション】
I 地域における学びを重視する学校
II 多様な学びを重視する学校

ステップ2 令和4年度 【重点ミッション】
1. 地域と学校との連携・協働による学習活動の開発・充実 (CLASSプロジェクトの全学的推進)

ステップ3 令和5年度 【重点ミッション】
3. 地学協働による体験的な活動の浸透 (地学協働推進委員会を核としたCLASSプロジェクトの全学的推進)

本校ならではの「1つのベクトル」として

2 コンソーシアムの構築

令和3年(2021年)8月 立ち上げ

<会議>
①事業の趣旨説明
②令和3年度計画
③質疑・意見交換

<参加・構成>
 ■町長、役場産業経済課・政策推進課
 ■町教育委員会(生涯学習課)
 ■町商工会、町青年会連所、町観光協会、白老アイヌ協会
 ■ウポポイ(博物館、運営本部広報課)
 ■生涯教育局教育支援課 (社会教育指導課・高校教育指導課)
 ■PTA会長

地域からの期待の受け皿

令和4年(2022年)12月 設立

<規約の策定>

第2条 目的
第3条 協働事業
第4条 代表者会
第5条 代表者会の役割
第6条 会長、副会長の職務
第7条 会長、副会長の職務
第8条 代表者会の運営

<実践の見える化>

■実績報告
■体制の点検
■相互交流

<構成編成>

■地域自治体・行政機関
■企業・経済団体・NPO等
■研究機関

■町教育長、教育委員会(生涯学習課)
■町役場産業経済課、政策推進課

■町商工会、町青年会連所、町観光協会、白老アイヌ協会、旧ウチカンバ

▲名古屋外国語大学(世界共生学部)
▲山合部白老元陣屋資料館、女の会
▲ウラボイ(博物館、運営本部広報課)

●担担総合振興局地域政策課
●担担教育局教育支援課(社会教育指導班・高校教育指導班)
●北海道教育庁(社会教育課高等学校教育課)

○白老東高校後援会会長
○白老東高校学校評議員会

学習プログラムの実効的バックアップ体制

3 地域コーディネーターの継承

<人選>

白老町教育委員会
生涯学習課との連携

<環境整備>

■職員室常設デスク
■専用パソコン配備

令和3年(2021年)7月 採用

<採用>

■現職、男性
■白老町出身(町内小・中学校卒業)
■主たる職業:白老町議会議員
■週15時間基本
※R4年度実績:年間約8万円

3 地域コーディネーターの継承

<業務の明確化>

①コネクティング
■学校⇄協働主体
■協働主体⇄協働主体
■学校⇄生徒
②交渉窓口
※ 対面交流、一日訪問学校、学校開キックオフ、セミナー等
③企画立案
④運営補助

<業務の共有>

■校内地学協働推進委員会

<雰囲気醸成>

■校長とアテンド
■会話・声かけ・相談の奨励
▲全校集会での紹介

<授業の実施>

■ⅡⅠ 地域学4回他、講師等
■ⅡⅠ 地域学4回他、講師等

チームの一員として、数多くの主体との連携を実現

地域コーディネーターの実際①

- 授業の目標や課題を共有し、教員とともに**授業の企画や計画にも参画**
- 「総合的な探究の時間」などで、外部講師や取材先の**選定や依頼**
- ⇒ 趣旨説明と協力依頼、日程調整、講師への授業内容や方向性について協議
- 行事(学校祭等)での地域**連携**、防災教室等での行政との**パイプ役**

地域コーディネーターの実際②

- 地域活動と学校の橋渡し
⇒ 地域のボランティア活動を紹介
- 町民対話学習では自ら**講師**に
- 生徒の成果発表会での**講評**
- 生徒の**進路相談**や**面接指導**
- 公務員試験等での**勉強法**の指導も
- 選択科目「**地域学**」では「町の課題」をテーマに**講師を担当**
- 授業中での**学習支援**(グループ学習や生徒個人への支援)
- 校内地学協働推進委員会に参加し共有化

4 プログラム連携を全学連携へ

名古屋外国語大学連携活動★地域課題解決に向けた交流・合同調査プログラム★

R3,R4,R5 【STEP1】「フィールドワークの意義と手法、ファーストコンタクト」

- 名古屋外国語大学准教授のオンラインレクチャー
- 名古屋外国語大学の学生とオンライン交流会

【STEP2】「高大合同フィールドワーク」

- 地元のお店を取材活動、お店の歴史、お店の方の思いを受け止める
- 取材の整理、課題発見・考察

R5 追加

【OPTION1-1】「高大合同調理実習」●高校調理室にて取材アイヌ伝統「オハウ」調理

【OPTION1-2】「高大交流報告会」●大学生プレゼンを1年生全員と3年生が参観、意見交換

【STEP3】「映像のプロによる動画編集講習」

【STEP4】「高校生単独取材・編集」 **【STEP5】「校内発表会」**

担当者をバックアップできる環境整備

名古屋外国語大学と 北海道白老東高等学校との教育連携に関する協定書

...

(趣 旨)
第1条 大学と高等学校とは、双方の情報関係に基づき、相互の教育機能について連携を行うものとする。

(教育連携事項)
第2条 教育連携に関する事項は、次の各号に掲げる通りとする。

- (1) 多文化共生や地域創生に向けた実情と課題の探究活動に関する事
- (2) 教育活動において協力を求めるための教職員及び学生との交流事業に関する事
- (3) 大学、高等学校双方の教育施設・設備の活用に関する事
- (4) 教育に係る情報交換や中長期的な連携構想に関する事
- (5) その他、双方が協議し、同意した事項に関する事

...

令和5年(2023年)11月30日 調印式

3 成果・課題について

《成果1》
授業で生徒が地域と関わる機会が飛躍的に増加

(地域)

- ・
- ・
- ・「高校生と関わってうれしい」「町に活気が出てきた」との声も

(生徒)

- ・
- ・

⇒視野の拡大、自分の進路や生き方、価値観に影響を与える

さらなる地域連携、地域交流への好循環

プロジェクトを終えるに当たって

「地学協働」こそが白老東ならではの魅力に！

白老東といえば！

- ・スクールミッション：「**地域における学びを重視する学校**」です。
- ・「地域コーディネーター」が繋いだ**現在活躍中の社会人と身近で交流**します。
- ・白老を核とした「地学協働コンソーシアム」が地域ネットワークの充実を担う

⇒ ⇒ ⇒ **地域からの信頼度アップ!** ⇒ ⇒ ⇒

歓迎され、親切な対応の中に学ぶ。**フィールドワーク**により深く学ぶ。

「探究的な学びを支える研究機関一体型学習」

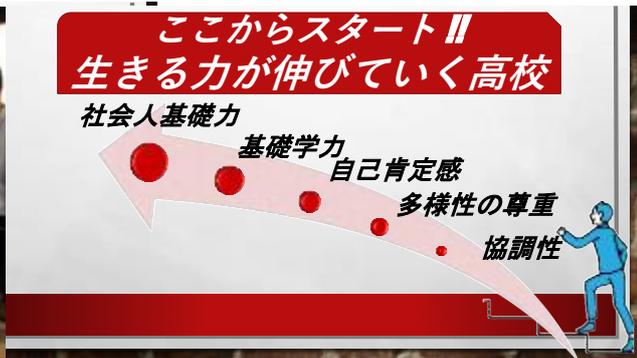
「仙台藩白老元陣屋資料館」との協働

1年生「総合的な探究の時間」
資料館にてグループテーマを定め、地域の歴史を探究 ⇒ 発表会

高校生のガイドを養成
ガイド団体「陣屋友の会」が指導

R4	R5
● イベント一般来場者向けガイド 3回	● イベントガイド 3回
● その他通常一般向けガイド 10回	● 一般ガイド 12回
	● 愛知県修学旅行 2年生向けガイド
	● 北海学園札幌高 2年生向けガイド
	● 本校1年生向けガイド

令和5年10月
▽ 高文連全道弁論大会 出場
▽ 白老町郷土文芸誌 寄稿



(「総合的な探究の時間」学年担当者より)

- ◆ 当初は「地域探究」を行うという目標を掲げたが、何をやっていいかまったく想像もつかなかった。
...
- ◆ 対話学習を企画し、数多くの方々の話を聞く機会を作ったが、生徒たちが徐々に人の話を聞くことができるようになっていくのを感じた。
- ◆ 1年次最後に、生徒たちがいくつかの団体のコラボ企画を考えることとしたが、発想や発表内容など教員が思った以上に完成度が高く成長を感じた。
...
- ◆ キャパオーバーかと感じつつも、とりあえずやってみるという形で始めたが、結果的には良かったことが多かった。
- ◆ 北海道 Class プロジェクトに取り組むにあたって、地域の方々と触れ合う機会を多く作ってきたが、そのことが生徒にとっても学校にとっても、地域との絆をつなげる良いきっかけになったと実感している。
- ◆ 地域の方々の、これまでの想像を超える協力的な姿勢が印象的で、更にこれからは学校と地域が協働する機会を増やしていきたい、いかなければとの思いを、自分の中に強く感じるようになった。
...

資料 白 8

令和 5 年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（3 年次）

学校名	北海道白老東高等学校
作成日	令和 5 年 1 2 月 1 5 日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	Collaboration
	検証の方法	各連携機関との有効性について成果をまとめる
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・白老町経済振興課と連携し、地元企業による合同企業説明会を実施することで、地元企業への興味・関心を高め、地元出身の生徒が少ない中、毎年 4～8 名の生徒が地元就職している。 ・町の関連団体、アイヌ関連団体、地域人材と連携し、地域課題の探究や地域の魅力の情報発信に繋がられた。

②	検証の項目	Literacy
	検証の方法	生徒によるルーブリック評価
	検証結果	<p>地域における探究学習を通してどのような点が成長したかという調査において、特に次の点について大きな成長が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の仕組みについて知ることができた。(41.5%) ・探究することの意味を理解できた。(38.3%) ・他の人の意見を尊重できた。(37.2%) ・調べたことを使う力が身についた。(34%) ・集めた情報を整理することができるようになった。(34%) <p>調査の結果から本校で策定したルーブリックの観点の中で「受容力」「課題解決能力」「情報活用能力」について特に向上が見られた。</p>

③	検証の項目	Adult
	検証の方法	聞き取り等により取組内容とその成果についてまとめる
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生と関わる活動に協力した結果「高校生に対する印象がプラスに変わった」「高校生の活動は地域を活性化させると思う」などの回答が得られた。 ・地域の活動やイベントなどに高校生が積極的に参加した結果、「活動そのものに活気が出る」「高校生の発想は貴重」をはじめ、多くの感謝の言葉をいただくことができた。 ・地域の活動の中で、高校生を指導する大人が生徒の将来や社会人として自立を目標とし、PDCAサイクルを意識して長期的な視野で指導している事例もある。 ・町民との対話学習やフィールドワークを通して、親や教員以外の多くの大人と接する中で、地域のために貢献する大人の姿に刺激を受けたり、進路や人生観に影響を受けたりしたと回答した生徒が多数出てきた。

資料 白 8

④	検証の項目	Student
	検証の方法	生徒に対するアンケート調査
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域への愛着に関して、地域学習を通して地域の方と関わる前後で「地域のことを好き」、「どちらかといえば好き」と回答した生徒が約60%から70%へと向上した。 ・ 地域への考えについて、地域学習を通して地域の方と関わる前後で「地域は自分に関りがあると思うし、関わりたい」と回答した生徒が32%から38%へ向上した。

⑤	検証の項目	System
	検証の方法	学校と地域の連携例とその成果をまとめる
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「地学協働コンソーシアム」を立ち上げ、年2回のコンソーシアム代表者会議を開催し、各学習プログラムを地域でバックアップしてもらう体制を構築している。 ・ 地域コーディネーターを通して築いた地域人材のネットワークの継続化を図るため、校内で「地学協働推進委員会」を設立した。 ・ 「コンソーシアム代表会議」等で、本プロジェクトにおいて配置されたコーディネーターの必要性や、コーディネーターの継続的な配置を望む意見が多数出された。

2 当事者の声について

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域について最初は「何もないところ」や、良くとも「自然」、「食材」くらいしか思い浮かばなかったが、それは自分が地域のことを知らなかっただけだったということに気がついた。 ・ 町民との対話やフィールドワークを通して、地域の様々な人と接して、地域にたくさん魅力のある人がいることに気づいた。 ・ 地域の人との対話を通して人生観が変わるほどの衝撃を受けた。 ・ 地域のために貢献している人の姿を見て刺激を受け、自分も何かできないかと考えるようになった。 ・ 卒業して白老を離れても、白老の魅力を伝えたいと思った。 ・ 高校生でも地域のためにできることがあるということを知った。 ・ 地域の活動を通して挑戦することの大切さを知ったり、今までできなかったことができるようになったり、自分で成長を感じられた。 ・ 地域活動に参加して、初めて白老東の生徒でよかったと思った。自分は必要されていると思った。この町のことを好きになった。
教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域で活躍する生徒の姿から、普段学校では見られない生徒のよさを発見できた。

資料 白 8

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年間を通して地域の方々とつながることで、生徒たちと地域の方々との距離が縮まったように感じる事ができた。また、生徒たちにとっても地域の方々の学校に協力してくれようとしてくれる気持ちを感じる事がプラスになったと感じる。地域と学校が近くなった。 ・ 白老の観光と産業というテーマでフィールドワークを行ったが、想像以上に生徒たちに地域というものを実感させる事ができたと思う。 ・ 総合探究をきっかけに、多くの場面で地域の方々と触れ合う機会ができ、生徒や学校にとって、地域とつながる良いきっかけになったと思う。 ・ 地域の方々の、とても協力的な姿勢が印象的で、学校と地域が協働する機会を増やしていきたいと強く感じるようになった。
地域の方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最近、白老東高校の取組が新聞や町の広報誌等で頻繁に取り上げられるようになり、地域の方々が学校への関心を持つようになり、存在感が確実に高まっている。 ・ 生徒が地域のボランティアやイベント等のスタッフとして活躍する機会が増え、地域の組織・団体やその活動自体に刺激を与え、活気が出てきた。 ・ 地域で活躍する本校生の姿が地域の人々にも認知されるようになり、学校のイメージアップにつながり、「最近、白老東の生徒は（よい意味で）変わった」「生徒ががんばっていますね」などの声も聞かれるようになった。 ・ 地域の方々から「高校生とかかわれてうれしい」や高校生と話をすることで「自分も勉強になった」「町に活気が出てきた」などの声が聞かれた。

3 今年度（令和5年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		・ 町民との対話交流【地域学】（5, 6月）
5	地学協働推進委員会 名古屋外大との打合せ	・ 地域の歴史（白老元陣屋）探究活動【1年総探】（6月）
6		・ アイヌ文化を知る巡検【2年総探】（7月） ※北海学園札幌校と連携
7	第1回コンソーシアム代表者会議 地学協働推進委員会 名古屋外大との打合せ	・ 商店街のフィールドワーク【地域学】（8月） ※名古屋外国語大学と連携
8		・ 地域の観光資源を探る巡検【2年総探】（8月）
9		・ 地域の課題を探る巡検【1年総探】（9月）
10		・ 商店街紹介動画の制作【地域学】（10月）
11	地学協働推進委員会 名古屋外大との高大連携調印式	・ 成果発表会【1, 2年総探、地域学】（12～2月）
12	第2回コンソーシアム代表者会議	
1	名古屋外大との打合せ	
2		
3	地学協働推進委員会	

資料 白8

4 自走可能な体制整備に向けた方策について

- ・コンソーシアムの組織を活用し、これまでの活動実績を蓄積しつつ持続可能なものにする。
- ・コンソーシアム規約の改定により、役職として地域コーディネーターを新設し、地域協働活動の実務において連絡、調整、支援を行い、必要に応じて助言をもらうこととした。
- ・校内委員会として「地学協働推進委員会」を立ち上げ、学校組織内で効率的・継続的・発展的な取り組みを目指している。

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

- ・連携校の鶴川高校を担当者が訪問し、地学協働の成果や課題、実例について説明を受け意見交換を行った。（R3年度）
- ・地元の中学校の地域学習で、高校生が地域についての中学生から取材を受けた。
- ・北海学園札幌高校と共同で、アイヌ文化学習を実施し、「仙台藩白老元陣屋資料館」で本校の生徒が解説に当たった。
- ・名古屋外国語大学と連携し、合同でフィールドワークやアイヌ文化学習（アイヌ料理の調理実習）を行った。
- ・名古屋外国語大学の学生による成果報告会に本校生徒が参加し、地域について大学生や町民と意見交換を行った。
- ・道外から見学旅行で「仙台藩白老元陣屋資料館」を訪問した修学旅行生に対し、本校生徒が解説を行った。
- ・地元の中学校の地域学習発表会を教員が参観し、意見・感想を述べた。また、高齢者大学の学生の方（10名程度）に、家庭総合（被服）の講師をしていただいた。

6 学校独自の取組・工夫

- ・職員室内に地域コーディネーターの机とパソコンを設置し、日常的に教員とコミュニケーションを取りやすいようにした。
- ・「地学協働推進委員会」を設置し、各学年間での取り組みの共有化、引継ぎの円滑化を図ることで、学校全体で組織的、継続的、発展的に取り組める体制づくりを進めている。
- ・毎年白老町を訪れる名古屋外国語大学と合同でフィールドワークやアイヌ文化体験等を実施し、より持続的な協力・連携体制を構築するため、今年度は高大連携協定を結んだ。
- ・授業をきっかけに、生徒有志が休日を中心に地域活動やイベントにスタッフとしてかかわる機会をつくり、地域でも高い評価を受けている。

資料 白 8

7 その他特記すべき事項

地域の歴史を学ぶ探究学習をきっかけに、「仙台藩白老元陣屋資料館」で高校生が解説活動を実施している。活動に当たっては資料館と学校とが一体となり、解説の指導から社会人に向けての教育、イベントの企画まで生徒の成長を見守っており、地域の活性化にも寄与している。

< 3年間のまとめとして >

8 3年間の成果

- ・本校の取組が新聞や町の広報誌等で頻繁に取り上げられるようになり、地域の学校に対する関心や存在感が確実に高まった。
- ・地域の人々との連携が強まったことにより、生徒が地域のボランティアやイベントに参加する機会が増え、生徒にとって良い経験を得る機会が増えている。
- ・地域で活躍する本校生の姿が地域の人々にも認知されるようになり、学校のイメージアップにつながり、「最近、白老東の生徒は（よい意味で）変わった」という声も聞かれるようになった。
- ・高校生が地域の活動に関わることで、地域の組織・団体やその活動自体に刺激を与え、活気が出ているという事例もある。
- ・地域の方々から「高校生とかかわれてうれしい」や高校生と話をすることで「自分も勉強になった」「町に活気が出てきた」などの声が聞かれた。
- ・地域を知ることを通して、多くの生徒の地域に対する愛着度は確実に高まっている。
- ・地域の様々な人と接することで、これまで地域の魅力と言えば自然や食材しか出てこなかった生徒から、地域の「人の魅力」に気がついたという声が多く出てきた。
- ・地域の人との交流を通じた体験的な活動を通して、普段の授業だけでは感じることはできない、学ぶこと、考えることの楽しさがわかってきた。
- ・地域の課題を理解し、地域に貢献している人の姿を見て、高校生でも地域に貢献できることを知り、自分も何かできないかと考える生徒が出てきた。
- ・親や先生以外の大人と関わることにより、視野を広げたり、実社会の現実に触れたりすることで、自分の進路や生き方、価値観に影響を受ける生徒が増えた。
- ・地域のために貢献する行動を通して、地域の人と触れ合いから自己有用感や自己肯定感が向上した生徒が見られた。
- ・地域と人との関わりが生徒の精神的な安定や心の拠り所となっている事例もある。

9 3年間の課題

- ・外部の人の都合によって日時を調整しなければならず、時には学校の予定を変更しなければならない場合も出てくる。この場合、教員全体の理解が不可欠である。
- ・「地域で学ぶ」場合、フィールドワークの有効性は非常に大きい。一方で移動手段に関連する予算の確保に課題が大きい。

資料 白 8

- ・多くの場合、地域の方はボランティアで協力してくれるが、依頼先によっては費用が発生する場合もある。現在は CLASS プロジェクト予算で対応しているが、今後こうした経費についてどう対応するかが課題である。
- ・地域と関わり合いながら学習を進める場合、主体性・創造性を持った教員が一定数いないと、学校全体の取り組みに発展していかない。担当がいなくなると一気に衰退する危険性をはらんでいる。
- ・3年間を通した学校全体としての計画・企画と具体的な実施計画と実行をどのような組織で分担し組み立てていくか。本校では委員会と学年によって取り組みを始めたばかりだが、学年間のギャップが生じないように、学年から学年へ引継ぎつつ、ブラッシュアップをいかに図るかが課題である。
- ・地域と関わるためには生徒に挨拶やマナー、他人に不快感や迷惑をかけないといった土台をしっかり身につけさせる必要がある。
- ・地域連携は外部との折衝から始まり、企画から実行まで大変なエネルギーや時間を必要とする場合が多い。推進のためにはもっと教員数に余裕があり、なおかつ主体的・創造的に考えられ、動ける教員の存在が不可欠である。
- ・地域に出ていく上で生徒への安全面への配慮、安全対策が重要となっている。